

『天皇・皇族実録』の成立過程

所

功

長らく内部の関係者しか見られなかった宮内庁書陵部所蔵『天皇・皇族実録』（全二八六冊）が、数年前から研究者には閲覧できるようになった。のみならず、昨秋より近世部分の影印複製本が順次公刊されつつあることは、皇室史に関心を寄せる一研究者として欣びにたえない。

そこで、早速第Ⅰ期全三十七巻のうち一回配本分十三巻（正親町天皇、靈元天皇）を購入した。また近刊予定の第二回配本分十二巻に含まれる『後桜町天皇実録』の全容は、既に四年前マイクロフィルムを頒けて頂き、同女帝の宸記（京都御所東山御文庫架蔵）を解読する本字内の研究会で活用している。

これらを通覧して実感することは、さすが戦前の宮内省図書寮で主力を注いだ編修事業の名に恥じない見事な成果だということである。特に近世の部分は、戦後数十年経った今日でも殆ど活字化されていない歴代宸記や公家日記なども博搜し随所に引用してあることなど、多大な功績と評価してよい。

それでは、この一大編纂書（以下「本実録」と称する）は、どのようにして作り上げられたのだろうか。その経緯は、ゆまに書房の複製本（各巻冒頭）に、藤井讓治氏（京都大学文学研究科教授）と吉岡眞之氏（国立歴史民族博物館教授）連名の「刊行にあたって」と題する簡潔な解説（以下「複製解説」と称する）で大筋を知ることができる。

しかし、もう少し詳しい成立事情を知りたいと思ひ、宮内庁書陵部に問いあわせたところ、幸いに関係文書の閲覧と

撮影を認められた、よって、既刊の「複製解説」を裏付けると共に、若干補訂する資料を、ここに紹介させて頂こう。

一 複製解説の要点

藤井・吉岡両氏による複製解説は、全文二ページ（約一二五〇字）の簡にして要をえた説明である。それを少し整理し直して、左に示そう（「」括弧内は解説文の引用）。

① 本実録の編修は、「一九一五年（大正四）、明治維新後に死去もしくは臣籍降下した皇族の実録編修に着手したことから出発し」、やがて「神武天皇より孝明天皇までの間の天皇・皇族の実録を完成することを目標とし」た。しかし、以後四年間で「四名の皇族」実録しか出来ていない。

② そこで「一九一九年（大正八）・図書頭森林太郎（鷗外）は……新たに編修計画を立案した。この計画は……編集規定と凡例を定め……スタッフを大幅に増員し……八年間で編修を完了する」予定であった。

③ しかし、その後「宮内省の定員削減」とか「実録の体様を紀事本末体から編年体に変更」したため、再三期限を延長して「一九三六年（昭和一一）……脱稿し……逐次印刷……が完了したのは一九四四年（昭和一九）七月である」。

④ その内容は、歴代の「各天皇・皇族ごとに編年体で編修され、『大日本史料』と同様に綱文を立てると共に、根拠となる史料を掲げる体裁で」「本文二八五冊にまとめ、総目録一冊を付している。」

⑤ その根拠史料は「宮内省図書寮を筆頭に内閣文庫・東京帝国大学史料編纂所など多くの機関や寺社、民間の所蔵者などから広く収集して提示し……問題があればそのつど案文を付して注意を喚起するなどの配慮もなされて」おり、「史料集としての価値は今日でも失われていない。」

なお、この解説の次に引かれている原本の「凡例」によれば、「本実録ハ、天皇別ニ謹修シ、后妃・後宮並ニ皇子已下概ネ四世孫ニ至ル皇親ノ行実ハ、夫々の天皇実録ノ中ニ収メタ」が、いわゆる「四親王家」については別途「各宮実録ヲ編修スル」予定であった。

その記載事項は、「概ネ降誕ニ始マリ大葬ニ終ル」行実について「初メニ綱文を掲ゲ……次ニ史料を駢列シテ」いる。『大日本史料』のような頭注見出しや関連図版はないが、各巻頭に「目次・略系図及び引用書目」が掲げてある。

二 「天皇実録」の計画

本実録の編修は、複製解説①に大正四年（一九一五）「皇族の実録編修……から出発」とある。しかしながら、宮内庁書陵部所蔵の『例規録』を調べてみると、明治四十一年（一九〇八）五月二十七日、図書頭が起案し、同六月十一日、宮内大臣の決裁した文書に、早くも次のような「天皇実録義例」十五条が付されている（便宜、句読点・濁点等を加え、漢字は新字に直し送り仮名も少し補ったところがある。以下同）。

天皇実録義例

- 一、本実録ハ、列聖ノ御事蹟ヲ記述スルヲ本義トスレドモ、今暫ク今上陛下ノ御事蹟ヲ記スルニ止メ、就中帝室日誌ノ後ヲ継ギテ、明治二十六年一月一日ヨリ筆ヲ起シ、略ボ成緒アルヲ待チ、溯リテ明治初年ヨリ編修ス。
- 一、天皇ノ御起居ハ、小事ト雖モ之ヲ記ス。臨時ノ朝会・儀典、亦皆之ヲ記ス。
- 一、天皇ノ御起居ト雖モ、日々恒例トシテ定レルコトハ、常ニ異ナリタル事故アルトキニ限り之ヲ記ス。例セバ、平日

出御・入御ノ如キ、凡ソ例刻ニ行ハセラル、時ハ載セザルガ如シ。

一、恒例ト雖モ、祝祭日ノ御親祭及ビ伊勢神宮奉幣・歌御会始・御講書始ノ如キハ之ヲ記ス。

一、詔書・勅書及ビ勅語ハ、事件ノ性質、発表ノ形式如何ニ拘ラズ、其ノ全文ヲ採録ス。

一、三后ノ事蹟ハ、天皇実録中ニ併録ス。

一、官吏ノ任免ハ、明治十八年官制改革以前ハ、勅任一等官、以後ハ親任官同待遇者ニ限り之ヲ採録ス。但シ宮内勅任官同待遇者ハ前後皆之ヲ載ス。

一、宮内省ノ官制ハ、其ノ大要ヲ記載ス。

一、功臣ノ薨卒ハ、或ハ国葬ヲ賜ヒ、或ハ正式ノ勅使ヲ立テラレ詠ヲ賜ハリシモノノミヲ掲記ス。

一、拜謁及ビ御陪食仰付ケラレシ場合ノ如キハ、必ズ其ノ姓名ヲ記ス。但シ、三大節拜賀ノ如キ、恒例ニ属スルモノハ此ノ限ニ在ラズ。

一、天災・地変等ニテ御救恤金ヲ賜ハリシ時ハ、其ノ事実ヲ略注ス。

一、本実録ハ、宮内省各部局並ニ内閣諸官省ノ文書・記録・官報及ビ帝室日誌・帝室例規類纂、其ノ他官撰書冊ヲ本據トシ、傍諸家ノ伝記等正確ナル記録ヲ博搜シテ収録ス。

一、踐祚以前ノ事歴ハ、之ヲ実録ノ首ニ略記シ、爾後ノ記事ハ、日ヲ以テ月ニ繋ケ月ヲ以テ年ニ繋ク。故ニ一事ノ顛末、数所ニ散見ス。然レドモ、間々又一所ニ匯収シ、或ハ条下ニ注記スルコトアリ。例セバ、立后・立太子及ビ皇太子成婚等ノ場合ニ於テ、条下ニ其ノ略伝ヲ記シ、又ハ其ノ由来ヲ溯記スルガ如シ。

一、平闕・避諱等ノ式ハ、一切之ヲ用キズ。

一、廃藩前諸侯及ビ藩士ハ、其ノ藩名ヲ名下ニ注ス。

これによれば、すでに明治四十一年（一九〇八）から、「列聖の御事蹟を記述する」歴代の「天皇実録」を構想していたこと、しかも当面「今上（明治）陛下の御事蹟を記す」ことに限定して着手するに先立ち、筆録すべき記事の範囲と書き方まで具体的に定めていたことが知られる。

三 「皇統譜」の作成

このような「天皇実録」編修計画とは別に、それより簡略な「皇統譜」が、明治の終りから大正年間に作成されている。その関係資料を紹介しておこう（図書寮「例規録」、以下㉔まで同上所収）。

すなわち、「明治四十四年十月現在」と注記されている文書の「目録」をみると、「皇統譜」の「凡例書式」として、①「皇帝」・㊦「皇后」・㊧「後宮」・㊨「皇親」・㊩「皇室籍／皇族籍」に分けてあり、各々の「凡例」全文が付され、さらに一部が例示されている。このうち、①の凡例とその例示㊦㊧㊨は、左の通りである（／は行詰の印、以下同）。

「皇統譜」 皇帝／凡例

一、皇統譜ハ、継承ノ所由、世代ノ順序ヲ主トス。故ニ単ニ大統ヲ掲ゲ、皇親・後宮ニ至ラバ、各其系譜ヲ編製シ、之ヲ本譜中ニ挿載セズ。

一、旧史ニ檀原ノ朝以後ヲ人皇ト称シ、其以前ヲ神代ト称ス。此譜、人皇ヲ主トシテ、猶神代ヲ前ニ略載シ、以テ其源ヲ明ニス。

一、陽成院天皇以下、大概諡号無く、其宮地ニ就キ某院ト称ス。旧史或ハ院字ヲ省キテ某天皇ト称ス。今『神皇正統

記』ノ例ニ從ヒ、某院天皇ト書ス。

一、御一代ニ係ル御諱・尊号・称詞ハ、皆之ヲ書ス。但、上世異字同義ノ御名数箇ニ及ブモノハ、其一ヲ挙グ。

一、從來、嫡母・養母・庶母等ノ別アリト雖モ、今特ニ仰テ国母ト為ス者ノミヲ挙ゲ、其所生等ハ「皇統譜徴」ニ詳ニス。

一、至尊ニ配偶シ坤位ニ備ハル者ト雖モ、其称谓ニ至リテハ、其当時ノ実ニ依リ、皇后・中宮・女御ト書ス。其ノ皇后崩後、更立セラル・モノ、及ビ皇后・中宮並ビ立テラル・モノハ、皆之ヲ挙グ。

一、元服・立太子・太上天皇尊号、及ビ元年並ニ即位ニ改元スルモノ、其歲月ノ明著ナルモノハ、之ヲ書ス。

一、即位・踐祚、上世其別無シ。桓武天皇以來之ヲ分チ行ハル。故ニ光仁天皇以上（前）ハ單ニ即位ヲ挙ゲ、桓武天皇以後ハ受禪・踐祚・即位、皆書ス。

一、大嘗祭ハ、上世以來歷朝必行ノ典式ナル故ニ、日本紀ニ於テハ、天智天皇以上（前）ハ定例トシテ之ヲ書セズ。而シテ中世以後ハ、故アリラ之ヲ行ハレザルアリ。今天武天皇以下、『日本紀』ノ例ニ從ヒ之ヲ書シ、以テ行ハレザルモノニ別ツ。

一、崩御年月日ノ下、特ニ陽曆推算ノ年月日ヲ注シテ年紀ノ参考ニ便シ、以テ御祭日相当ノ所由ヲ明ニス。

一、在位ノ年月ハ、即位・受禪・踐祚ヨリ崩御・讓位ノ間ヲ算ス。

一、降誕・即位・崩御等、其地名ヲ挙ケズ。其变故アリ若クハ遠地ニ於テスルモノハ、特ニ之ヲ書ス。

一、行幸ハ、畿甸ヲ去ルニ非レバ書セズ。但、其变故ニ際シ、若クハ時勢已ムヲ得ザルニ由リ遷幸セラル・モノハ、之ヲ挙グ。

一、凡遷都、暫ク徒テ旧ニ復スル者ハ書セズ。其宮号モ亦同ジ。

一、現在山陵及ビ改葬、皆之ヲ挙グ。其火葬・分骨及ビ仮葬ハ、之ヲ省ク。

- 一、降誕・立太子・崩葬等ノ時日、旧記、或ハ公布ノ日ヲ記スルアリ。今実ニ從テ之ヲ書ス。
- 一、『日本紀』『古事記』等、諸書ニ記載セル名称、義同クシテ字異ナルモノハ『日本紀』ニ從フ。
- 一、北朝五代ハ、後龜山院天皇ノ後ニ附載ス。
- 一、皇統ノ数ヲ掲ゲ、以テ大位繼承ノ叙ヲ明ニシ、世系ノ数ヲ注シ、以テ世数ノ叙ヲ詳ニス。
- 一、歲月・地名ノ明確ナラズ、伯仲ノ序次、諸書異同アルハ、或ハ之ヲ欠キ、或ハ旧ニ依ル。
- 一、旧記、異同其說一ナラズ、此譜ヲ修ムルニ先ダチ、「皇統譜料」ヲ編纂シ、博ク材料ヲ網羅シ、マタ「皇統譜徴」ヲ編製シテ、其採択セル本據ヲ証シ、疑義ニ渉ル者ハ、一々論断ヲ加ヘ之ヲ明ニス。其引據セル所ノ書ハ、悉ク其目ヲ掲ゲ、以テ本書ノ附録トス。

㊤ 皇統第一 世系第六

神武天皇

神^{カム}日本^{ヤマト}磐余^{イハレヒコ}彦^ノ尊^ノ、初名狭野^{サノノ}尊^ノ、又若御毛沼^{ワカミゲヌノ}尊^ノ、又豊御毛沼^{トヨミゲヌノ}尊^ノ。

鷓鴣草^{ササユリ}不合尊^{イフサノミコ}第四子ノ御母正妃玉依姬命ノ皇后媛踏鞢五十鈴媛。

庚午歲正月朔〔甲辰○紀元前六十一年一月二十六日〕降誕。／甲戌歲、立太子。／甲寅歲、東征。

辛酉歲正月朔〔庚辰○二月十一日〕即^ニ天皇位於畝傍^{アサナガ}橿原宮^{イカリハラノミヤ}。奉^ニ天安璽鏡^{テンアンシキョウ}劍於正殿^{マサノミヤ}。是年為^ニ元年^ニ。

七十六年丙子三月十一日〔甲辰○紀元七十六年四月三日〕崩。御年一百三十七歲／在位七十五年三月。

葬^ニ大和國高市郡畝傍山東北〔今白檀村大字洞〕陵^ニ。

㊦ 皇統第六十 世系第三十七

宇多院天皇

定省。^{サダメ}／光孝天皇皇子／御母皇太后班子女王／中宮藤原温子。

貞觀九年丁亥五月五日〔癸卯〕紀元千五百二十七年六月十四日〔降誕。元慶年中、元服。

仁和三年丁未八月二十六日〔丁卯〕立太子／同日踐祚／同年十一月十七日〔丙戌〕即位／四年戊申為元年／同年十一月二十二日〔乙卯〕大嘗祭。

寬平九年丁巳七月三日〔丙子〕讓位／同月十日〔癸未〕太上天皇

昌泰二年己未十月十四日〔甲戌〕落飾。名^ニ空理又金剛覺^一。

承平元年辛卯七月十九日〔甲辰〕紀元千五百九十一年九月八日〔崩／御年六十五歲／在位九年十一月。

葬^ニ山城國葛野郡宇多大内山〔今、花園村大字宇多野字大山内〕陵^一。

⑤ 皇統第百 世系第七十一

光格天皇

兼仁、^{トモヒト}初名^{モロヒト}師仁、^{サチノ}称^{サチノ}祐宮。

後桃園院天皇御養子／実慶光天皇第六子／御養母後桃園院天皇女御准三后藤原維子／御母成子内親王／中宮欣子内親王。

明和八年辛卯八月十五日〔癸未〕紀元二千四百三十九年十月三日〔降誕。

安永八年己亥十一月八日〔戊子〕後桃園院天皇御養子／同月二十五日〔乙巳〕踐祚／九年庚子十二月四日〔戊申〕即位。

十年辛丑正月朔〔甲戌〕元服／同年四月二日〔乙巳〕改^ニ元天明^一／天明七年丁未十一月二十七日〔辛卯〕大嘗祭。

文化十四年丁丑三月二十二日〔乙丑〕讓位。／同月二十四日〔丁卯〕太上天皇。

天保十一年庚子十一月十九日〔乙巳〕紀元二千五百年十二月十二日〔崩／御年七十歲／在位三十七年四月

ところで、この凡例については、別筆（墨書）で「凡例ハ、二十四年（宮内）大臣經伺制定ノモノト大ニ相違ノ点アルハ、改訂ヲ加ヘラレタルニ由ルト雖モ、大臣決裁セラレタルモノニアラズ」と注記されている。これにより考えれば、「皇統譜」はすでに二十年前の明治二十四年（一八八一）に制定された凡例があつたこと、それに改訂を加えた右の④も宮内大臣の決裁を経ていないことになる。されば、この四十四年以降にも加訂された可能性があり、それに基づいて大正年間に「皇統譜」が作成されたのであろう。

四 「皇族実録」の計画

さて、すでに明治四十一年から進められていた「明治天皇実録」の編修は、その後どうなったかを示す史料がある。それは大正四年（一九一五）三月二十三日、図書頭が宮内大臣の裁決をえた左の文書にほかならない。

天皇実録編修ノ義ニ付テハ、去ル明治四十一年六月十一日伺定ノ「義例」ニ依リ、「明治天皇実録」ノ編修ニ従事致居候処、昨年十一月「明治天皇紀」編修ノ為、臨時編修局設置相成候ニ付テハ、此際、一旦「明治天皇実録」ノ編修ヲ中止シ、更ニ「仁孝天皇実録」ノ編修ニ著手スルヲ順序ト存候ヘドモ、他方ニ於テ、明治維新後、崩御又ハ薨去セラレ、及ビ臣籍ニ入リタル皇族ノ実録ニ付テモ、亦此際編修ニ著手スルニ非ゼレバ、他日材料蒐集ノ便宜ヲ失フ虞有レ之候ニ付テハ、天皇実録ノ編修ハ姑ラク之ヲ見合セ、右「皇族実録」ノ編修ニ著手スルコトトシ、其ノ「義例」ニ付テハ、追テ詳細ノ調査ヲ遂ゲタル上、案ヲ具シ經伺可レ致候ヘドモ、一般ニ七歳未満ニシテ薨去相成候皇族ノ実録ハ、之ヲ其ノ父ノ実録中ニ、又離婚ニ因リテ臣籍ニ復シタル妃ノ実録ハ、之ヲ其ノ夫ノ実録中ニ挿入候様致度、此段

相伺候也。

右の文書によれば、数年前からの「明治天皇実録」編修は、大正三年「明治天皇紀」の本格的な「臨時（帝室）編修局」設置に伴って中止された（同紀は昭和八年完成）。そして、代りに、明治維新から半世紀近い間に崩御・薨去されたり臣籍に婚嫁・降下された方々に関する材料を集めて「皇族実録」の編修に着手することになったのである。その該当者は、嘉言親王（明治元年薨去）以下四十九名の薨去者、英照皇太后（同三十年崩御）と照憲皇太后（大正三年崩御）、及び恒子女王（明治元年婚嫁）以下十四名の婚嫁者、輝久王（明治四十三年臣籍降下）など六十七名の皇族（物故者と離脱者）が列挙されている。

そこで、同四年三月「皇族実録」の「義例」案が定められた。その「記載事項」は左の通りである。

「皇族実録」義例

一、皇族実録記載事項

- 一、名／幼称 又名 法号 宮号 称号等
- 一、父／第何子女／一、母／生母
- 一、誕生／時刻 産殿 産殿伺候 浴湯ノ儀 脱衣ヲ納ムル儀 著衣始等
- 一、命名／賢所・皇靈殿・神殿ニ誕生命名ノ奉告／一、称号ノ宣賜。
- 一、産養／五十日祝 百日祝等／一、忌明／一、賢所、皇靈殿、神殿ノ進謁／宮参
- 一、養育／大傳 乳母 御養育掛 其他養育ニ関スル一切ノ事項

- 一、教育／傳育官 御用掛 学校 教導担任職員 教導ノ科目 學歷 讀書始等
- 一、魚味始／一、髮置／一、深曾木／髮曾木／一、著袴／一、著裳／初笄／一、帶直／一、鉄漿始
- 一、成年式／元服 鬢曾木 月見等
- 一、婚嫁／成約 結婚ノ禮 立后ノ詔書 婚嫁ノ勅許 婚嫁ノ年齢 配偶者ノ名等
- 一、入内／一、立后
- 一、猶子。養子（誰々ノ猶子・養子トナルコト）
- 一、著帶／御帶進献 著帶ノ儀等
- 一、所生ノ子女及ビ養子女／子女ノ身上關係／一、離婚
- 一、親王宣下／一、宮号ノ宣賜及ビ承継
- 一、敍勲・任官／官歴 外国勲章ノ受用 叙品 叙位等
- 一、立儲／立太子（立太孫） 立太子式 儲君御治定等
- 一、崩薨／時刻 場所 原因等／一、葬儀／葬祭ノ次第 葬儀掛員 葬儀參列員等
- 一、陵墓／場所 陵墓名等
- 一、臣籍降下／臣籍降下ノ事由 降下後ノ爵氏名 賜姓等
- 一、附第／一、落飾／隠居 得度 復飾等／一、准母
- 一、院号／一、尊号／太上天皇 太皇太后 皇太后等／一、追号
- 一、祝典／誕辰日祝 式典 有卦祝 算賀等
- 一、葬祭／父母・配偶者・兄弟・子女等ノ薨去 葬儀 年祭等

- 一、服喪／宮中喪 大喪 其他ノ服喪 除服等／一、疾患負傷／病名 容体 主治医等
- 一、行啓／一、行幸啓扈從／一、御差遣／場所 使命等／一、外国貴賓接待
- 一、台臨／場所 用件 資格等
- 一、出張旅行／内地外国公私用トモ 其ノ往返ノ発着時刻 場所 用件等
- 一、班位（特ニ班位ノ変更セラレタル場合）
- 一、皇位継承順序ノ変更／一、摂政／就任 退任等／一、太傅／就任 退職等
- 一、皇族会議員／一、貴族院議員／一、公益法人ノ社員・会員・役員
- 一、後見人・保佐人／後見人・保佐人ノ勅選セラレタル時 他ノ後見人・保佐人トナリタル時
- 一、遺留財産／遺留財産ノ設定・廃止・相続 其他ノ異動／一、普通財産／重要ナル財産ノ得喪
- 一、賄料／一、賜邸／一、遺産／遺産ノ清算
- 一、親族会議／親族会議ヲ設ケラレタル原因 人名 其ノ辞任・解任・決議等
- 一、懲戒／停權又ハ剥權ノ懲戒 復權／一、治産ノ禁／禁治産 準禁治産ノ宣告・解除／一、失踪／失踪ノ宣告 取消

しかし、これほど詳細な史料を集めるとことは、容易でなかったにちがいない。そのためか、この「皇族実録」は、四年間に四人分しか出来ず、計画の変更に迫られている。

五 『天皇・皇族実録』の編修（その二）

そこで、大正八年（一九一九）から新たに「天皇・皇族実録」が立案された。当時の図書頭の森本太郎（鷗外）は、就任三年目に叙上の「天皇実像」と「皇族実録」の構想を併せて練り直し、二月九日に上申して宮内大臣の決裁をえた①「編修規定」と②「実録凡例」は、次の通りである（②の別記「天皇実録様式」「皇族実録様式」は省略）。

① 「天皇皇族実録」編修規程

第一条 天皇皇族ノ実録編修ニ付テハ、本規程ノ定ムル所ニ依ル。

第二条 実録ハ、一代ノ起居ヲ記述シ、以テ其ノ事蹟ヲ明カニスルモノトス。但シ婚嫁・離婚、其ノ他ノ事由ニ依リ臣籍ニ入りタル皇族ニ付イテハ、臣籍ニ入ルマデノ事蹟ヲ記述スルニ止ムベシ。

第三条 実録ハ、之ヲ事項ニ類別シ、編年ニ依リ事ヲ以テ日ニ繋ケ、正確簡明ニ記述シ、且其ノ據ル所ヲ示スベシ。
実録ノ凡例ハ、図書頭之ヲ定ム。

第四条 実録ニハ、其ノ首ニ引用書目及ビ目次ヲ掲ゲ、絵図アルトキハ之ヲ末尾ニ附載スベシ。

第五条 天皇ノ実録ハ、歴代ニ由リ之ヲ区文スベシ。但シ重祚ノ天皇ハ此ノ限ニ在ラズ。

第六条 皇后ノ実録ハ、其ノ夫タル天皇ノ実録中ニ合載スベシ。但シ皇后ニシテ大統ヲ継ギタルモノハ、之ヲ其ノ天皇ノ実録中ニ併載スルコトヲ得。

第七条 天皇・皇后ノ実録ニハ、左ノ事項ヲ記載スベシ。但シ踐祚及ビ立后以前ノ事蹟ニ付テハ第十三条ノ規程ニ依ル。

- 一、御名／二、父／三、母／四、誕生／五、命名／六、踐祚／七、摂政／七、元号／九、即位禮／十、大嘗祭
- 十一、皇居、離宮／十二、太傳／十三、成年式／十四、大婚／十五、皇子
- 十六、朝儀／十七、大喪、宮中喪、服喪／十八、行幸啓／十九、外国交際

二十、崩御／二十一、大喪儀／二十二、追号／二十三、山陵／二十四、其ノ他特ニ顯著ナル事項

従前ノ天皇、皇后ニ付テハ、前各号ニ掲ゲタル事項ノ外、称制、皇都、讓位、受禪、落^{前カ}饌、尊号、院号、入内、准母等ノ事項ヲ記載スベシ。

第八条 前二条ノ規定ハ、中宮、尊称太后及ビ贈后ノ実録ニ之ヲ適用ス。

第九条 皇族ノ実録ハ、所出天皇ニ由リ之ヲ区分シ、従前ノ皇統譜ニ排列シタル順序ニ依リ、所出天皇ノ実録ノ後ニ附載スベシ。

第十条 皇族妃及ビ七歳未満ニシテ薨去セル皇族ノ実録ハ、前条ノ規定ニ拘ラズ、各其ノ夫及ビ父ノ実録中ニ合載スベシ。

第十一条 従前ノ四親王家ニ属スル皇族ノ実録ハ、第九条ノ規定ニ拘ラズ、宮号ニ依リ之ヲ区分シ、当主親王ヲ主位ニ立テ之ニ合載スベシ。但シ出家ノ皇族ノ実録ハ、特ニ之ヲ区分シ、長幼ノ序ニ従ヒ其ノ後ニ附載スベシ。

第十二条 明治以後、崩御及ビ薨去セル皇后・皇族ノ実録ハ、前数条ノ規定ニ拘ラズ、之ヲ各別ニ編修スベシ。但シ七歳未満ニシテ薨去セル皇族及ビ離婚セル皇后・皇族妃ノ実録ハ此ノ限ニ在ラズ。

第十三条 皇族ノ実録ニハ、左ノ事項ヲ記載スベシ。

一、名／二、父／三、母／四、誕生／五、命名／六、賢所・皇靈殿・神殿ノ進謁

七、養育／八、教育／九、宮号ノ宣賜及ビ継承

十、成年式／十一、婚嫁／十二、王子／十三、敘勲任官／十四、立太子・立太孫

十五、祝典／十六、喪祭／十七、服喪

十八、御名代／十九、御差遣／二十、行啓／二十一、台臨／二十二、旅行

二十三、皇位継承ノ順序／二十四、班位／二十五、摂政／二十六、太傳

二十七、皇族會議員／二十八、貴族院議員／二十九、法人其ノ他ノ団体ノ社員・會員・役員

三十、後見人・保佐人／三十一、遺産・遺留財産／三十二、重要財産ノ得喪

三十三、歳費／三十四、賜邸、殿邸／三十五、待遇／三十六、親族會議

三十七、懲戒／三十八、禁治産、準禁治産／三十九、民事訴訟、刑事訴訟／四十、失踪／四十一、交際

四十二、薨去／四十三、喪儀／四十四、陵墓／四十五、臣籍降下／四十六、其ノ他特ニ顯著ナル事項

従前ノ皇族ニ付テハ、前各号ニ掲ゲタル事項ノ外、誕生祝、元服、髮置、深曾木、著袴、帶直、著裳、鬢曾木、鉄漿始、親王宣下、養子、猶子、実子、准母、儲君御治定、敘品、敘位、出家、僧位、僧官、封祿、尊号、院号等ノ事項ヲ記載スベシ。

第十四条 図書頭ハ、各編修官ニ実録ノ編修ヲ分擔セシメ、之ニ補助員ヲ附屬セシムルコトヲ得。

前項ノ場合ニ於テハ、編修官ハ編修功程書ヲ調製シ、之ヲ図書頭ニ提出シテ其ノ認可ヲ受クベシ。

第十五条 実録ノ起草ニ付テハ、編修官専ラ之ヲ担任シ、資料ノ採集・謄写及ビ整理ニ付テハ、其ノ一部ヲ補助員ニ分担セシムルコトヲ得。

第十六条 実録ノ資料ニ供セル記録文書ハ、実録ノ区分ニ從ヒ類別編綴シテ簿冊トナシ、簿冊毎ニ其ノ目錄ヲ附シ、実録ノ附録ト為スベシ。

第十七条 実録ニハ、編集者ノ官氏名、編修ノ年月日ヲ記入シ、図書頭之ニ署名捺印スベシ。

第十八条 実録ノ編修ヲ終リタルトキハ、図書頭、其ノ都度報告書ヲ作成シ、宮内大臣ノ決裁ヲ受クルコトヲ要ス。

第十九条 実録編修ノ順序ハ、図書頭、宮内大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム。

第二十条 図書頭ハ儀式祭典及ビ行幸啓等ノ場合ニ於テ、必要アルトキハ寮員ヲシテ其ノ実況ヲ視察報告セシメ、他日

編修スベキ実録ノ資料ニ備フベシ。

附 則

第二十一条 本規程ハ明治天皇ノ実録ニ之ヲ適用セズ。

② 実録凡例

- 一、天皇・皇族ノ実録ハ、別記ノ様式ニ依ル。
- 一、天皇・皇族ノ実録ハ、事蹟ノ繁簡ニ從ヒ、其ノ実録ニ款項ヲ増設シ、又ハ章若クハ節ヲ設ケズ。
- 一、天皇実録ノ様式第一章ニハ、天皇・皇后及ビ所出皇族ノ事蹟ノ大綱、並ニ編修ノ例言ヲ記載ス。
- 一、天皇実録ノ様式第二章乃至第四章、第六章、第九章乃至第二十章、第二十二章乃至第二十四章ニハ、皇后、中宮、尊称太后、贈后ノ事蹟ヲ併載ス。
- 一、天皇踐祚以前ノ事蹟ハ、皇族実録ノ様式ニ依ル。
- 一、皇族実録ノ様式中第四章第一節及ビ第八章ヲ除クノ外、各章節ニハ妃ノ事蹟ヲ併載ス。
- 一、天皇ノ外、皇族ニハ総テ敬語ヲ使用セズ。
- 一、人名ハ氏名ヲ書シ、氏名ノ詳ナラザルモノハ姓又ハ称号ヲ書ス。
- 一、編者ニシテ考説ヲ加フル場合ニハ、首ニ「按」ヲ置キテ本文ト區別ス。
- 一、編者ノ自註ハ、首ニ圈ヲ置キテ原註ト混セザラシム。
- 一、儀式、祭典、勅書其ノ他、常例ニ係ル記事ハ、之ヲ初見ノ条ニ記載シ、餘ハ其ノ要領ヲ挙グルニ止ム。
- 一、儀式、祭典、恩賜等ノ事項ニシテ、各章節ニ掲グル事項ニ関連スルモノハ、之ヲ其ノ中ニ収ム。

一、儀式ニ関連スル祭典及ビ饗宴ノ事項ハ、之ヲ其ノ儀式中ニ収ム。

一、誕生、崩薨等ノ時刻ニシテ實際ト発表ト異ナル場合ニ在リテハ、専ラ発表ノ時刻ニ拠リ實際ノ時刻ハ之ヲ註書ス。
一、大喪儀、喪儀ノ記事ハ、百日祭迄トス。

この「天皇・皇族実録」は、翌九年六月九日の文書によれば、前年十二月に「八年計画」で編修する案が決定され、それに伴って編修従事者の増員を要望している。

すなわち「編修官」は二人から三人増やして五人、「編修官補」は新たに十人置く。ただ「宮内属」は三人減らして十八人とするが、「雇員」は三人増やして十人、「写字生」も八人増やして二十二人とすることを上申したのである。

六 『天皇・皇族実録』の編修（その二）

しかし、そのころ宮内省が全般に「定員削減」を迫られていたから、右の増員案は全く認められず、逆に「編修官補四人、雑仕五人の減員」を余儀なくされた。そこで、他の事情も加わって編修計画が予定のごとく進まないため、大正十四年（一九二五）二月に至り、重大な方針転換がはかられた。そのいきさつを示す文書^④と、それを具体化する「十ヶ年計画」の「年数ノ算定」^①、および新たな「編修規程」^⑤と「編修功程」^⑥は、左の通りである。

④ 「天皇・皇族実録」編修ニ関スル件

天皇・皇族実録編修ノ件、大正八年十二月十一日付経伺ノ計画ニ基キ、大正九年ヨリ向フ八ヶ年ヲ以テ完成スベク、

同年六月之レニ着手シ、爾來三年有半ヲ經過致候。其間ニ於ケル成績ハ、時々報告致置候通、靈元院天皇以降十帝、有栖川・伏見・桂・閑院四親王家ノ明治以前ニ属スル御事蹟ヲ脱稿セシニ過ギズシテ、此ノ年月間ニ対スル予定成績ノ半ニモ達セズ。

斯ク遅延スルノ止ムヲ得ザリシ所以ノモノハ、幾多ノ原因有之候ヘ共、採取セル実録史料、予定ヨリモ頗ル多量ナリシコト、之レガ主因ニ有之。而シテ從來ノ編修様式ニテハ、其ノ構成複雑多岐ニ亘リ、随ヒテ實際執筆スルニ際シ予期セザリシ不便ノ頻出セシガ如キ、又編修ニ從事セシ者ノ減員ヲ見ルニ至リシ等モ、亦遅引ノ一助因ト被_レ認候。

茲ニ既往ノ經驗ニ依リ更ニ審議ヲ重ネタル結果、紀事本末体ニ依レル從來ノ編修様式ヲ改メテ、各御代実録、皆年序ヲ逐ヒテ記述スル所ノ所謂編年体ヲ用フルヲ可ナリト信ジ候。今左ニ編年ト紀事本末ト兩体ニ付キテ、其ノ得失ノ重ナル点ヲ列挙セバ、

第一、歴史編修ノ方法ハ、古來紀伝・編年・紀事本末ノ三体アリテ、各々長短得失アリト雖モ、本実録ハ御代々ノ御事蹟ヲ御一人ヅゝ人ヲ本位トシテ記述スルモノナルヲ以テ、全体ヲ通ジテ見ルトキハ紀伝体ニ属ス。サレバ其ノ各御伝ニ記述セラルベキ御事蹟ニ付キテハ、年月ヲ逐ヒテ記載スルカ、分類聚録スルカノ二ニ歸スベシ。

然ルニ、之レヲ古來ノ成史ニ徴スルニ、紀事本末体ヲ用ヒタルハ甚ダ稀ニシテ、編年ニ依リテ記スルヲ通例トス。是編年体ヲ取ル所以ノ一ナリ。

第二、本実録ハ、史実ノ精確周密ナルヲ期シ、記述ノ最モ公平ナルヲ要ス。故ニ誤謬・遺漏無カルベキハ勿論、成ルベク編修者ノ私見ニ依レル批評・判断ヲ挟マズ、以テ各御代ノ実録ニ統一アラシムベシ。

然ルニ、從來ノ編修体裁ノ如ク画一ノ型式・範疇ヲ設ケテ之レニ拘束セラル、時ハ、御事蹟ノ性質ニ依リテ、或ハ何レノ章節ニ記載スベキカ疑惑ヲ生ズルモノアリ、或ハ二三ノ章節ニ重複記載セザルベカラザルモノアリ、或ハ又何レノ

章節ニモ正当ニ記載シ得ザルモノアリテ、其ノ困難少カラズ。

然ルニ、型式ヲ離レテ自由ニ年序ヲ逐ヒテ敘スル時ハ、少シモ不自然ナル点ナク、遺漏ヲ生ズル憂ナシ。精確周密、亦隨ヒテ期スベシ。是編年体ヲ取ル所以ノ二ナリ。

第三、時勢ニ推移アリ、文物制度ニ變遷アリ、之レヲ強ヒテ古今ヲ通ジテ画一ナル型式ニ依リテ記載スルトキハ、其ノ時勢・文物ノ推移、變遷ヲ分明ナラシメザル憾ナキ能ハズ。然ルニ、編年体ニ依ルトキハ、事實ノ真相ヲ觀易ク、又變遷推移ノ迹ヲ顯ハシ易キヲ覺ユ。是編年体ヲ取ル所以ノ三ナリ。

第四、単ニ一人ノ伝記ヲ編修スル際ニハ、章節ヲ設ケ事件ヲ類聚シテ、所謂紀事本末体ニ記述スルヲ便トスル事アリ。然レドモ、其ノ章節ハ各人ノ伝記ニ各別ニ之レヲ設クベキモノニシテ、万人ニ通ジテ一定画一ノ章節ヲ設クベキニアラズ。人各々個性アリ、若シ画一ノ範疇・型式ニ依リテ記述スルトキハ、其ノ間ニ無理ヲ生ジテ、個人ノ特異点ヲ没却スル虞アリ。寧ろ型式ヲ離レ自由ニ敘述シテ、各人特異ノ色彩ヲ鮮明ナラシムルヲ優レリトスベシ。是編年体ヲ取ル所以ノ四ナリ。

第五、皇族ニ在リテハ、其ノ御事蹟ノ詳細ヲ知り得ザル方々頗ル多シ。然ルニ、從來ノ編修様式ニハ有ラユル場合ヲ予想シテ章節ヲ設ケタルヲ以テ、之レニ當嵌ムルニ困難ニシテ、且不体裁ナルヲ免レズ。斯ル場合ニハ、章節ニ依ラズ、直ニ事實ヲ書キ下シタル方、体裁遙ニ可ナルベシ。是編年体ヲ取ル所以ノ五ナリ。

第六、從來ノ編修様式ハ御一代ノ事蹟ヲ其ノ性質ニヨリ分類聚録スル仕組ナルヲ以テ、有ラユル史料ヲ蒐集シ尽スニアラザレバ起草ニ着手シ難キ傾キアリ。即チ自然ニ編修期限ヲ長カラシムルヲ免レズ。是編年体ヲ取ル所以ノ六ナリ。

第七、年月ヲ逐ヒテ記述スルトキハ、連続セル一事実モ年月ノマヽニ所々ニ分割記載セラルベキニヨリ、事件ヲ通覽シ得ザル不便アリ。是必然編年体ノ歴史ニ伴ヘル短所ナリトス。

サレドモ、本実録ニハ短時日ニ結了スル事件ハ、便宜本末ヲ纏メテ一ヶ所ニ記述シテ、幾分カハ紀事本末体ノ長所ヲ参酌スルコト、シ、又互ニ関連セル記事ニハ参照ヲ附シテ、編年体ノ欠点ヲ補ハンコトヲ期ス。猶、他日機会ヲ得テ詳細ナル索引ヲ付スルヲ得バ、一層通覽ノ便ヲ得ベシ。

従来ノ編修様式ハ、編修頗ル不便ニシテ、其ノ出来上レル実録モ亦体裁宜シキヲ得ズ。内容不自然ヲ免レザルモノナルコト、斯クノ如シトセバ、速ニ之レヲ改メテ、編年体ト為スヲ得策トスベシ。

而シテ猶記事ノ確実ヲ証セン為ニ、本文ノ次ニ史料ヲ記載スルコト、セバ、体裁・内容共ニ整ヒ、不自然ナク遺漏ナク、精確周密ニシテ統一アル実録ヲ得ベシト信ジ、既ニ大正十二年八月、敍上ノ様式ニ依リテ編修ニ着手、爾来一年有半ノ経験ヲ得テ、大ニ其ノ自信ヲ増シタルノ感アリ。

前敍ノ改正御允許ノ上ハ、先ヅ神武天皇ヨリ後西院天皇ニ至ル御歴代並ニ后妃・皇子女、皇胤ノ実録ヲ完成シ、次ニ既成ノ靈元院天皇以後ノ実録ヲ同一体裁ニ改修補訂ヲ加ヘ度、又四親王家ノ実録ハ、既ニ大部分脱稿シタルト、他ノ皇族ノ如ク天皇実録ニ附載セズ、別個編修ノ方針ナルヲ以テ必シモ同一体裁ニ改修スル必要無_レ之被_レ認候ニ付、従来ノ方針ニ依リ完了致度、将来ノ編修方法ニ付テハ、

第一、編修ノ機関ハ現在ノ如ク五部ニ区分シ、時代ヲ分チテ分担編修ス

第二、編修各部ハ編修官ヲ以テ主任トシ、同官補及ビ雇員ヲ之レニ分属ス。

第三、実録全部ノ完成期間ヲ十箇年トシ、大正十二年八月ヨリ起算ス。

第四、事業ノ進捗ヲ計ル為メ、起草期間ヲ四期ニ分チ、其ノ功程ヲ督励スルコト。

起草ノ順序及ビ分担ノ詳細ハ、別表ノ如シ。

第五、実録編修ノ方針ハ、前敍ノ如ク時代ニ推移アリ制度ニ改変アリテ、従来ノ如ク画一的範型ヲ定ムルハ却テ編修

上不便多キヲ以テ、現行実録編修規程及ビ、実録凡例等ハ之ヲ廢止シ、更ニ別紙ノ実録編修規程ヲ設ケテ、其ノ大綱ヲ示スニ止メ、編修ノ体裁統一等、詳細ノ事項ハ、時々ノ編修會議ニ依リテ之ヲ決スルコト。以上ノ事由ニ基キ、実録ノ体裁ヲ改善シ、編修ノ完成ヲ速カナラシメ度、案ヲ具シ此段仰「高裁」。

① 十ヶ年計画、年数ノ算定

一、八年計画ニ於ケル実録並ニ資料總数量予定

歴代天皇、皇胤ノ実録、一万五百八十枚、資料三万四千百五十枚

四親王家皇族実録、三千九百〇五枚、資料一万九千三百四十四枚

計 一万四千四百八十五枚、資料五万三千四百九十四枚

一、八年計画ニ於ケル功程ノ予定

一組五人、一日ノ功程、実録凡二枚、資料七枚／五組、一日ノ功程、実録凡十枚、資料三十五枚

一ヶ月（二十日間）功程、実録二百枚、資料七百枚

一ヶ年（十二ヶ月）功程、実録二千四百枚、資料八千四百枚

八ヶ年 功程、実録一万九千二百枚、資料六万七千二百枚

此ノ内、幾多ノ支障ヲ見越シ、数量二割ヲ減ズルモノト見テ、

実録一万五千三百六十枚、資料五万三千七百六十枚

以上ノ計算ヲ以テ八ヶ年ニ全部ノ完成ヲ予定セリ。

一、八年計画案ニ於ケル第一事業ノ實際ト予定トノ比較

(イ) 成功予定期間ト實際成功期間トノ比較

予定成功期間 實際成功期間

第一部、一年一〇月 二年 六月 〔大正九年六月着手、同十一年十二月完了〕

第二部、一年八月 三年 一月 〔大正九年六月着手、同十二年七月完了〕

第三部、一年二月 二年 五月 〔大正九年六月着手、同十一年七月完了〕

第四部、一年一〇月 二年 四月 〔大正九年六月着手、同十一年九月完了〕

第五部、一年九月 三年 一月 〔大正九年六月着手、同十二年七月未完了ノママ次期へ〕

平均約 一年一〇月 二年 十一月

即第一期平均約一年十ヶ月ニ対シ、實際成績ハ平均約二年十一月ニシテ、約一年強ノ遅延ヲ見タリ。

(ロ) 予定数量ト實際数量トノ比較

第一部ヨリ第四部ニ至ル總数量（第五部ハ未完了ニツキ省ク）

予定数量 實際数量 増加数量

実録 二、九三三枚 三、二二八枚 二九五枚

資料 一二、二七七枚 二一、四三三枚 九、一五六枚

即実録ニ於テ予定数量ニ対シ約一割ノ増加ヲ示シ、資料ニ於テハ予定数量ニ対シ約七割五分ノ増加ヲ示セリ。

一、実録編修完成ニツキテノ新計画

八年計画案ニ於ケル第二期以後全部完成マデノ予定年限ハ六年二ヶ月ニシテ、之レヲ以上比較セル第一期實際成功期間ノ率ヲ以テ遂行スルトセンカ、尚九年六ヶ月ヲ要ス。而シテ第一期事業ノ予定ヨリ遅延シタル主タル原因ノ一

ハ、半途ニシテ各部減員ヲ見タルニ由ルモノナレバ、其ノ減員ノマヽノ人員ヲ以テ今後ノ事業ニ従事スルニ於テハ、遅延率ハ更ニ増加スベク、且ソノ数量ノ増加亦前途ノ如クナルヲ以テ、之ガ完成ニハ今後尚十数年ヲ要スベシ。

因テコヽニ編修規程ヲ改正シ、資料ノ重複増加ヲ避ケ、編修能率ノ昂上ヲ計ルニ於テハ、編修規程改正ノ結果、既成実録改修ノ事業ヲモ加ヘテ、十箇年（大正十二年八月起算）ヲ以テ実録編修ノ業ヲ大成シ得ベシト信ズ。

⑩「天皇・皇族実録」編修規程

第一条 天皇実録ハ、一代ノ起居ヲ注記シ、以テ其ノ事蹟ヲ明ニスルモノトス。

皇族実録モ、亦前項ニ準ズ。但、臣籍ニ入タル者ハ、臣籍ニ入ル迄ノ事項ヲ記述スルニ止ム。

第二条 実録ハ編年ニ依リテ記述シ、其ノ史料ヲ本文ノ次ニ適載ス。前後関連セル事項ハ、按文ヲ附シテ参照ニ便ス。

第三条 天皇実録ハ、一代毎ニ区分シ、某天皇実録ト称ス。

皇族実録ハ、天皇実録ニ附載ス。

第四条 皇后・中宮・尊称太后・贈后ノ実録ハ、夫タル天皇ノ後ニ附載ス。後宮宮人ノ事蹟モ亦之ニ準ズ。

第五条 皇子女皇胤ノ実録ハ、所出天皇、後宮宮人ノ事蹟ノ後ニ記ス。

第六条 有栖川・伏見・桂・閑院ノ四親王家ノ実録ハ、前条ノ規定ニ拘ラズ、宮号ニ依リ各別ニ記述ス。

第七条 前三条ニ揚ゲタル皇族記載ノ順位ハ、皇統譜ニ排列シタル順序ニ依ル。

第八条 皇族妃ノ実録ハ、夫タル皇族ノ後ニ附載ス。

第九条 実録ニ記載スベキ事項ノ梗概、左ノ如シ。

一、御名・称号・宮号及ビ命名等

二、父母・養父母・准母並ニ養子・猶子・実子

三、誕生／四、深旨木・元服等ノ儀式／五、師傅・講字

六、立儲・立親王・叙品・任官・待遇

七、登極（踐祚・受禪・即位・大嘗祭）・称制・摂政／八、神器／九、元号・改暦

十、讓位・尊号・院号・落飾・入寺

十一、皇居・離宮・奠都・殿邸／十二、御料・所領

十三、入内・立后・婚嫁／十四、出産

十五、神事／十六、佛事／十七、朝儀

十八、重要官職／十九、政事・軍事／二十、外国交際／二十一、行幸啓・旅行

二十二、皇族賜姓／二十三、文学技芸／二十四、賜与・進献

二十五、山陵・国忌／二十六、喪祭

二十七、宴遊／二十八、算賀／二十九、疾病

三十、崩薨・喪儀／三十一、追号／三十二、陵墓／三十三、奉祀

三十四、其ノ他、時代ニ依リ特殊ナル事項

第十条 実録ノ典拠タル史料ハ、正確ニシテ特異点アルモノヲ記載シ、多ク羅列スルヲ要セズ。但、誤リ伝ヘラレタル

史料ト雖モ、必要ト認ムルモノハ之ヲ記載スルコトヲ得。此ノ場合ニハ、按文ヲ付シテ之ヲ弁証ス。

第十一条 按文ヲ付スル場合ハ、〔按〕ヲ置キテ本文及ビ史料ト区別ス。

第十二条 宸翰・宸影其ノ他必要ト認ムルモノヲ撮影・模写シテ挿入スルトキハ、其ノ所藏者・来歴等ヲ記入ス。

第十三条 実録ノ本文ハ、漢文直訳体トシテ、莊重典雅ナラシメ、史料ハ原文ニ従フ。

第十四条 各天皇実録ニハ、天皇・皇族ノ系譜、内容ノ目次、引用書目ヲ掲記ス。

②「天皇・皇族実録」編修功程 第一部

第一期 大正十二年八月至大正十五年七月

天皇 代数 年間

(3)文武天皇至淳和天皇 十二代 〔天武天皇十一年至承和七年〕百五十八年

三宮・後宮宮人、六十三人／皇子・皇女・皇胤、二百〇七人

第二期 大正十五年八月至大正十八年七月

天皇 代数 年間

(4)仁明天皇至光孝天皇 五代 〔弘仁元年至仁和三年〕七十八年

(1)神武天皇至安康天皇 二十代 〔紀元前六十一年至安康天皇三年〕千百七十七年

三宮・後宮宮人、百〇四人／皇子・皇女・皇胤、五百十人

第三期 大正十八年八月至大正二十一年七月

天皇 代数 年間

(2)雄略天皇至持統天皇 二十一代 〔允恭天皇七年至大寶二年〕二百八十五年

三宮・後宮宮人、六十人／皇子・皇女・皇胤、二百九十六人

第四期 大正二十一年八月至大正二十二年七月

		天皇	代数	年間
(23)中御門院天皇至後桜町院天皇		四代	〔元禄十四年至文化十年〕百十三年	
三宮・後宮宮人、九人／皇子・皇女・皇胤、十四人				
但、本期ニ於テハ曩ニ旧規程ニ依リテ編修ヲ了シタル実録ヲ、新規定ニ依リテ改修ス。				
〔天皇・皇族実録〕編修功程 第二部				
第一期	大正十二年八月至大正十五年七月	代数	年間	
天皇				
(5)宇多院天皇至朱雀院天皇	三代	〔貞觀九年至天曆六年〕八十六年		
三宮・後宮宮人、二十一人／皇子・皇女・皇胤、百十二人				
第二期	大正十五年八月至大正十八年七月	代数	年間	
天皇				
(6)村上天皇至一条院天皇	五代	〔延長四年至寛和八年〕八十六年		
三宮・後宮宮人、十八人／皇子・皇女・皇胤、六十人				
第三期	大正十八年八月至大正二十一年七月	代数	年間	
天皇				
(7)三条院天皇至後三条院天皇	五代	〔天延四年至延久五年〕九十八年		
三宮・後宮宮人、十三人／皇子・皇女・皇胤、五十七人				
第四期	大正二十一年八月至大正二十二年七月			

天皇 代数 年間

(25)後桃園院天皇・仁孝天皇・孝明天皇 三代 〔宝曆八年至安永八年、寛政十二年至慶應二年〕八十九年

三宮・後宮宮人、十四人／皇子・皇女・皇胤、十八人

但、本期ニ於テハ曩ニ旧規程ニ依リテ編修ヲ了シタル実録ヲ、新規程ニ依リテ改修ス。

〔天皇・皇族実録〕編修功程 第三部

第一期 大正十二年八月至大正十五年七月

天皇 代数 年間

(イ)有栖川宮熾仁親王・威仁親王 二代 〔天保六年至大正二年〕七十九年

妃、一人／王子・王女、四人

天皇 代数 年間

(8)白河院天皇・堀河院天皇 二代 〔天喜元年至大治四年〕七十七年

三宮・後宮宮人、十三人／皇子・皇女・皇胤、十八人

第二期 大正十五年八月至大正十八年七月

天皇 代数 年間

(9)鳥羽院天皇至二条院天皇 五代 〔康和五年至建久三年〕九十年

三宮・後宮宮人、二十八人／皇子・皇女・皇胤、四十六人

第三期 大正十八年八月至大正二十一年七月

天皇 代数 年間

				(10) 六条院天皇至順徳院天皇			
				三代			
				〔長寛二年至仁治三年〕七十九年			
				三宮・後宮宮人、三十七人／皇子・皇女・皇胤、八十六人			
				第四期 大正二十一年八月至大正二十二年七月			
				天皇			
				代数			
				年間			
				(11) 仲恭天皇至四条院天皇			
				三代			
				〔建保六年至仁治三年〕二十五年			
				三宮・後宮宮人、六人／皇子・皇女・皇胤、八人			
				〔天皇皇族実録〕編修功程 第四部			
				第一期 大正十二年八月至大正十五年七月			
				(12) 伏見宮邦家親王王子・王女 六人			
				天皇			
				代数			
				年間			
				(12) 後嵯峨院天皇至伏見院天皇			
				五代			
				〔承久二年至文保元年〕九十八年			
				三宮・後宮宮人、六十人／皇子・皇女・皇胤、百三十七人			
				第二期 大正十五年八月至大正十八年七月			
				天皇			
				代数			
				年間			
				(13) 後伏見院天皇至後村上天皇			
				五代			
				〔正応元年至正平二十三年〕八十一年			
				三宮・後宮宮人、三十六人／皇子・皇女・皇胤、百四十六人			
				第三期 大正十八年八月至大正二十一年七月			
				天皇			
				代数			
				年間			

(14)後龜山院天皇至後小松院天皇 二代 [正平二十三年至永享五年] 六十六年

(15)光厳院天皇至崇光院天皇 三代 [正和二年至応永五年] 八十六年

三宮・後宮宮人、十四人／皇子・皇女・皇胤、二十八人

第四期 大正二十一年八月至大正二十二年七月

天皇 代数 年間

(16)後光厳院天皇・後円融院天皇 二代 [延元三年至明德四年] 五十六年

(24)光格天皇 一代 [明和八年至天保十一年] 七十年

三宮・後宮宮人、十五人／皇子・皇女・皇胤、三十九人

但、本期中、光格天皇実録ハ旧規程ニ依リ編修ヲ了シタルモノヲ、新規程ニ依リテ改修ス。

「天皇・皇族実録」編修功程 第五部

第一期 大正十二年八月至同十五年七月

天皇 代数 年間

(17)称光院天皇至後花園院天皇 二代 [応永八年至文明二年] 七十年

三宮・後宮宮人、三人／皇子・皇女・皇胤、四人

第二期 大正十五年八月至同十八年七月

天皇 代数 年間

(18)後土御門院天皇至後柏原院天皇 二代 [嘉吉二年至大永六年] 八十五年

三宮・後宮宮人、六人／皇子・皇女・皇胤、十六人

第三期 大正十八年八月至同二十一年七月

天皇 代数 年間

(19)後奈良院天皇至正親町院天皇 二代 「明応五年至文禄二年」九十八年

三宮・後宮宮人、十人／皇子・皇女・皇胤、二十八人

第四期 大正二十一年八月至同二十二年七月

天皇 代数 年間

(22)靈元院天皇至東山院天皇 二代 「承応三年至享保十七年」七十九年

三宮・後宮宮人、二十人／皇子・皇女・皇胤、三十七人

但、本期ニ於テハ、曩ニ旧規程ニ依リテ編修ヲ了シタル実録ヲ、新規程ニ依リテ改修ス。

〔天皇・皇族実録〕編修功程 第六部

第一期 大正十二年八月至同十五年七月

天皇 代数 年間

(20)後陽成院天皇至明正院天皇 三代 「元龜二年至元禄九年」百二十六年

三宮・後宮宮人、十六人／皇子・皇女・皇胤、五十六人

第二期 大正十五年八月至同十八年七月

天皇 代数 年間

(21)後光明院天皇至後西院天皇 二代 「寛永十年至貞享二年」五十三年

三宮・後宮宮人、八人／皇子・皇女・皇胤、二十四人

※ 右㉔の各項の上の数字(1)～(21)は、歴代天皇の代数による順序を示す私柱。

このうち㉔㉕によれば、大正九年六月から同十二年七月までの約三年間に、従来の「八年計画」に従って、第一期事業の霊元天皇から孝明天皇までの十帝、および有栖川・伏見・桂・閑院の四親王家の明治以前の事績は、実録三二八枚・資料二一四三三枚を脱稿した。しかし、この時点で既に予定より約一年も遅延していた。その原因は、採取した史料が極めて多いこと、逆に編修の従事者が減員されたこともあるが、根本的には従来の「紀事本末体」では構成が複雑多岐に亘り計画的な執筆が難しいためである。

そこで、史体の長短を検討の結果、各御代ごとの「編年体」に改めることになった。そして従来の進行状況を参考に、更めて「十ヶ年計画」を立て直し、従来の「編修規程」を大幅に改めた。即ち、㉔(全十四条)と新しい具体的な㉔「編修功程」を作り、この大正十二年八月から十年間を四期に分けて順次編修する運びとなったのである。

七 『天皇・皇族実録』の完成

この十ヶ年計画は、途中で御代替りなどもあって少し延びた。けれども、昭和十一年(一九三六)十二月二十一日、図書頭から宮内大臣あてに次のような報告書を提出している(図書寮の「重要雑録」)。

(前略) 編修ノ完成ヲ速カナラシムル為ニハ、従来ノ編修様式ヲ改メテ編年史料体トナスノ可ナルヲ認め、編修規程ヲ改正シ、経伺ノ上、大正十二年八月ヨリ向フ十年ヲ期シテ完成ニ努力セリ。偶々大正十五年九月「皇統譜令」ノ公布

アルヤ、之ガ登録案調成ノ必要ヲ生ジ、コノ調成ニハ更ニ調査研究ヲ要スベキ事項多カリシ為メ、コノ間、実録編修ニ専ナル能ハズ。止ムヲ得ズ実録完成期限延長ノ承認ヲ待テ、刻苦励精ノ結果、漸ク本年七月ヲ以テ、予定セル「天皇・皇族実録」全部ノ稿本謹修ヲ終了シタルヲ以テ、官制ヲ改正シテ編修官・編修官補ノ定員ヲ減ジ、八月以降、残務整理ニ従事シ、茲ニ完了を告グルニ至レリ。

本実録ニ収ムル所ハ、神武天皇ヨリ孝明天皇ニ至ル歴代天皇、光厳・光明・崇光・後光厳・後円融ノ五天皇、合セテ百二十四方、各天皇ノ皇后ヲ始メ奉リ後宮ノ全部六百八十五方、並ニ皇族二千二百四十一方、總計二千五十万ニシテ、其ノ稿本ハ一千二百九十三冊、二十九萬四千枚ニ上レリ。

本実録ハ「皇統譜」ト相俟チテ、皇室ニ於ケル最モ貴重ナル記録ナルヲ以テ、昭和六年度ヨリ、編修ノ成ルニ随ヒ、印刷局ニ托シテ逐次印行ニ著手シ、銳意其ノ進捗ヲ計リツゝアリ。

然レドモ、其ノ刊本冊数ハ三百冊以上ニ達スル見込ニシテ、印刷ノ完成ハ之ヲ尚ホ数年ノ後ニ期セザルヲ得ズ。因ツテ茲ニ、今日マデニ印刷ヲ終レル第四十二代文武天皇ヨリ第六十七代三条天皇ニ至ル「歴代天皇・皇族実録」四十五冊、並ニ第九十一代後宇多天皇、第九十二代伏見天皇ノ各天皇・皇族実録七冊、合セテ五十二冊ヲ捧呈スルニ止メザルヲ得ザルハ、甚ダ遺憾トスル所ナリ。

本実録ノ体例ハ、各天皇毎ニ区分シ、天皇ノ御事蹟、皇后以下後宮ノ御事歴、並ニ所出皇族ノ御起居ヲ収録シ、夫々編年史料体ヲ用ヒ、年月ヲ逐ウテ記述シ、其ノ史料ヲ本文ノ次ニ排列シ、前後関連セル事項ハ按文ヲ附シテ参照ニ便シ、実録ノ本文ハ莊重典雅ナル文体ヲ用ヒ、史料ハ原文ニ従ヘリ。又史実ノ精確、記述ノ公正ヲ期シタルヲ以テ、一切私見ヲ加ヘズ、其ノ弁証スベキモノハ之ヲ按文ニ譲レリ。又各天皇実録ノ巻頭ニハ、天皇・皇族ノ系譜、内容ノ目次、引用書目ヲ掲記セリ。

而シテ有栖川宮・伏見宮・桂宮並ニ閑院宮ノ四親王家ノ皇族実録ハ、他ノ皇族ノ如ク所出天皇ノ実録ニ附載セズ、宮号ニ依リ各別ニ編修スル方針ナリシト、又大正十二年編修様式改正ノ際、既ニ大部分脱稿シ居リタルトニ依リ、之ニ対シテハソノ様式ノ改修ヲ施サズ、最初ノ様式ニ従ヒ、事項別ニ類聚シ記事本末体ヲ以テ叙述シ、別ニ参照史料ヲ付スル体例ヲ採レリ。

本実録ニ収録シタル史料ハ、図書寮文庫ニ收藏セル文書記録ハ素ヨリ、東山御文庫・内閣文庫・東京帝国大学史料編纂所ヲ始メ、関係アル社寺等ニ亘リ、汎ク之ヲ募集シ、其ノ数実ニ三千五百四十六種ノ多キニ及ベルコトハ、別表ノ如クナレドモ、最モ重要ナル史料トナレルモノハ、列聖ノ宸記ヲ始メ当時ノ日記類是ナリ。

宸記ニシテ今日其ノ全部ノ伝ハラズ、断篇ノ遺存スルモノモ少カラザレドモ、「花園天皇宸記」・「後伏見天皇宸記」・「後桜町天皇宸記」並ニ「後崇光太上天皇御記」(貞成親王「看聞御記」)ノ如キハ、概ネ欠巻ナク伝ハリ、之ニヨリテ盛徳鴻業ハ勿論、日常ノ御動靜ヲモ拝察スルコトヲ得タルコト少カラズ。

顧ミレバ、本実録編修ニ要シタル年月ハ必シモ短シト云フベカラズ。サレド、収録スベキ所広汎ニシテ、史料ノ募集鑑別、史実ノ考証等、亦容易ナラザルモノアリ。従ツテ、定メラレタル期間中ニ於テ最善ノ稿本ヲ謹修スルニ就テハ、最モ苦心ヲ払ヒシ所ナリトス。

昭和十一年十二月(二十一) 日

図書頭 渡部 信

これによれば、「天皇実録」の編修は、大正十二年(一九二三)の八月から新しく「編年史料体」により十年計画で再開された。その事業は、同十五年の「皇統譜令」公布に伴い、前述のごとく早くから進められてきた「皇統譜」の登録調成に協力するため時間を取られ、少し期限を三年延長して、昭和十一年(一九三六)の七月に完成(そのあと半年

で残務整理」するに至ったのである。

その内容は、神武天皇から孝明天皇まで、北朝五代も含めて百二十四方の御代ごとに纏められた稿本は、合計一二九三冊にものぼる。しかも、すでに同六年から成るに従って印刷したものが、この時点で五十二冊捧呈されている。その全冊の印刷が完成するのは、同十九年七月である。

八 『四親王家実録』の改修

ただ、いわゆる四親王家の実録は、すでに大正十二年以前、従来の「紀事本末体」で一通り編修したものがあり、そのままになっていた。そこで、昭和十八年（一九四三）八月二日、それを「編年史料体」に改修して印刷する事業の計画が、金田才平図書頭から松平恒雄宮内大臣あて、次のごとく上申されている（図書寮「実録編修録」）。

伏見宮・桂宮・有栖川宮・閑院宮「四親王家実録」改修並ニ其印刷ニ関スル事業開始ノ件

「四親王家実録」ハ曩ニ一応ノ編修ヲ了シタルモ、其編修様式ハ紀事本末体ナルヲ以テ之ヲ改修シ、其ノ主体タル「歴代天皇・皇族実録」ト同一様式タル編年史料体ト為シ、同実録ニ倣ヒテ之ヲ印刷ニ付セザルベカラズ。

而シテ現行「天皇・皇族実録」校訂印刷事業ハ、明十九年七月ヲ以テ完結スル予定ナルニ依リ、其ノ直後「四親王家実録」改修事業ニ着手シ、向フ五ヶ年五月ヲ以テ編修ヲ終了シ、引キ続キ二年ノ日子ヲ以テ印刷ノ功ヲ完了セントス。

謹デ案ズルニ、伏見宮以下四親王家ハ、皇室ノ御連枝トシテ、我皇統ノ上ニ於テ最も重要ナル御関係ニアルハ、改メテ述ブル迄モナシ。就中伏見宮ハ、後伏見天皇ノ皇系ニ出デ、初代栄仁親王以下二十一代、星霜ヲ重ルコト五百有余

年、其間当主各宮ヲ始メ、親王・諸王多クハ御歴代ノ御義子ト爲リ、内ハ聖德ヲ輔翼シ奉リ、外ハ風教文藝ニ丕續ヲ建テ、門葉常ニ繁茂シ、維新後ノ皇族十三宮ハ皆悉ク其統ニ出ヅ。

又、桂・有栖川・閑院ノ三宮家ニ在リテハ、夫レ夫レ統ヲ正親町・後陽成・東山三天皇ノ直胤ニ受ケ、各宮家ノ諸王、亦皆御歴代ノ猶子タルノミナラズ、宮家創始以後、或ハ入ツテ大統ヲ繼ギ（有栖川宮第二代良仁親王〔後西天皇〕、閑院宮典仁親王タ子〔光格天皇〕）給フアリ、或ハ出デテ宮家ノ繼嗣（有栖川宮第三代幸仁親王、桂宮第三代穩仁親王、其他略之）ト爲リ給フアリ。交互相倚リ相補フコト一再ニ止ラズ。以テ四親王家ト皇統トノ御関係ノ緊密不離ナルヲ知ルベキナリ。

従ツテ、歴代天皇・皇族実録完了スルモ、万一「四親王家実録」ノ之ニ伴フナクンバ、大正・昭和兩時代ニ亘レル宮内省曠古ノ盛業トシテ百代ノ後ニ誇示スルニ足ルベキ「天皇・皇族実録」ノ一大瑕瑾タルノ議ヲ免レ得ザルナリ。

加之、既修「天皇・皇族実録」ニ於テハ、出デ、親王家ヲ創立、若クハ繼紹シタル各宮ニ就キテハ、単ニ其御名ノミヲ挙ゲテ、一切ノ記事ハ当該宮家実録ニ譲ル方針ノ下ニ編修セラレ居ルヲ以テ、「天皇実録」ト同一系体ノ「四親王家実録」ヲ編修スルニアラザレバ、天皇及ビ皇族実録ノ完璧ハ之ヲ期スルヲ得ザルナリ。

就テハ、別紙計畫案（省略）ノ通り、新タニ編修官二名、編修官補及ビ史生各四名、總計十名ヲ以テ陣容ヲ整ヘ、明治十九年八月ヨリ直チニ「四親王家実録」改修ニ着手セントス。尤モ「四親王家実録」改修ハ、本寮編修課ノ主管事務タル実録編修ノ本旨ニ基キテ、之ヲ經常部ニ繰リ入レ、本実録改修完結ノ上ハ、編修官二名ハ同官補、史生各二名、計六名ヲ以テ直チニ現代御実録資料編輯若クハ其他ノ重要事業（別通「編修課ニ於ケル今後ノ事業」参照）ニ着手シ、而シテ「四親王家実録」ノ印刷事務ハ、本改修事業ニ従事シタル編修官補及ビ史生各二名、計四名ヲ以テ當ラシムル予定ナリ。茲ニ別通計畫案相添ヘ、上申候也。

現行「天皇・皇族実録」印刷事業ハ、時局ノ影響ニ依リ印刷局ノ事務幅濫シ、其ノ数量平時ニ数倍セルト、本寮事業ノ掛員ハ、常時定員ノ約三割内外欠員並ニ応召者アルトニ依リ、本事業ノ完成ハ、已ムナク予定期限ヨリモ二三ヶ月遅延スルヤモ計リ難シ。因ツテ、之ガ残務処理ト「四親王家実録」改修準備期間ヲ五ヶ月ト見込タリ。

これによれば、「四親王家実録」は、改修に一年五ヶ月、印刷に二年を予定し、そのため編修官二名・編修官補四名・史生四名の増員を求めたのである。その「別紙計画案」をみると、既修の「伏見宮実録」（一八五方）は九十六冊、「有栖川宮実録」（五九方）は百五十冊、「桂宮実録」（三〇方）は二十七冊、「閑院宮実録」（三九方）は三十九冊、合計（三一二方）三一二冊ができていた。

しかも、それを編年史料体に改修すれば、それぞれ約「三割増」と見込まれ、さらに従来なかった「各宮家正妃実録」も、それぞれ「平均五〇頁」増補する。そのため、実際の改修には昭和十九年から五年間、印刷に二年間を要するとみて、具体的な経費も計上されている。しかし、同二十年の敗戦・同二十二年からの抜本的な官制改革（宮内省↓宮内府↓宮内庁へと縮小）に伴い、図書寮も諸陵寮と合併して書陵部となり、右の改修と印刷は書陵部の編修課に引き継がれたのである（『書陵部紀要』創刊号参照）。

（平成十八年三月二十五日稿、七月七日補訂）

ハ付記ノ本稿に抄録させて頂いた関係資料（宮内省図書寮『例規録』『重要雑録』『実録編修録』）の閲覧・撮影と掲載について御高配を賜った宮内庁図書課公文書係の関係者各位に感謝を申しあげたい。また、この『天皇・皇族実録』が順調に全巻複製刊行されることを念じてやまない。